

青丘文庫研究会 月報

No.294

2019年5月1日

青丘文庫研究会 〒657-0064 神戸市灘区山田町3-1-1 (公財)神戸学生青年センター内

TEL 078-851-2760 FAX 078-821-5878 <http://ksyc.jp/sb/> e-mail hida@ksyc.jp

①在日朝鮮人運動史研究会関西支部 (代表・飛田雄一)

②朝鮮近現代史研究会 (代表・水野直樹)

郵便振替<00970-0-68837 青丘文庫月報>

年間購読料3000円。在日朝鮮人史研究関西支部会費、5000円/年(雑誌3冊を入手できます。)

※ 青丘文庫に寄付する図書購入費(2000円/年)は2019年4月より廃止します。

<巻頭エッセイ>

在韓華僑問題研究会の思い出

堀内 稔

一昨年、梁永厚先生、姜在彦先生があいついで亡くなられた。両先生とも青丘文庫研究会とは深い関係があり、その他いろいろと幅広い活動をしておられた。そうした活動のなかの一つとして、在韓華僑問題研究会がある。この研究会については、きちんと整理をして記録を残しておかなければと前々から思っているが、まだ手がつけられずにいる。ここでは、この研究会の活動を思い出すままに書いてみた。

金英達さんからこの会への参加を呼びかけられたのは、1999年の秋頃だったと思う。私は朝鮮窒素関係の研究をしていた際、水力発電工事に多くの中国人労働者が働いていたことを知り、簡単に報告したことがあった。その関係から金英達さんから呼びかけを受けたと思われるが、とりあえず参加を表明した。

その年の暮れ、鶴橋の喫茶店で設立のための準備会が開かれた。その席上で話された姜在彦先生の会設立の趣旨説明は、今でもはっきり記憶している。「季刊三千里」の編集をしていたとき、「この雑誌では在日朝鮮人に対する差別や無権利状態が主張されているが、韓国における華僑がどのような差別、無権利状態の置かれているのか知っているのか」との内容の投書があったという。そのときから在韓華僑の問題が頭をはなれず、この研究会を立ち上げようとした動機となったと話された。

翌2000年3月に1回目の研究会が開かれ、在韓華僑問題研究会はスタートした。2回目であったらうか、李正熙さんや済州島出身の辛在卿さんなども参加された。李正熙さんはその後青丘文庫研究会でも2回ほど報告され、辛在卿さんには済州島でよくお世話になっている。

同年5月の研究会の時に事件が起こった。待ち合わせていた駅に金英達さんが現れなかったのである。研究会の会場は毎回異なり、場所の確保は幹事である金英達さんに任せっきりであったので、集まった会員は右往左往するばかりであった。その日の研究会は梁永厚さんの自宅で開かれ、何とか事なきをえたが、その日すでに金英達さんが亡くなられていたことは後で知った。

研究会の実質的な推進役の金英達さんが亡くなられたことで、会は大きな痛手をこうむったが、梁永厚さんや田慶江さんなどが後を継いで、実質的な活動は2年ほど続けることができた。定例の発表のほか、韓国の研究者である梁必承氏(だったか?)との交流やフィールドワークなどもあった。それらの成果を本にして発行する予定であったが、どういういきさつだったのか、結局、発行されないで終わってしまった。会の正式解散は2004年頃だったように記憶している。

朝鮮近現代史研究会(2019.1.13)報告要旨

<1> 木村光彦著『日本統治下の朝鮮 統計と実証研究は何を語るか』(中公新書、2018年)を批判する 佐野通夫

標記の書籍は帯に「それは「収奪」だけだったか ―。の大きな文字を持ち、「まえがき」にはこう

ある。

日本統治下の朝鮮（1910—45年）で何が起こったか。この主題をめぐる、今までに数多くの本が書かれてきた。それらは通常、政治については弾圧、経済については搾取あるいは収奪、そして貧困化といった言葉で語る。（略）

日本でも知識人は、多かれ少なかれこうした見方を共有し、それがまた社会的常識となっている。これに反する考え—たとえば、日本は朝鮮で善いこともした、きちんとした統治を行ったし、社会経済のシンポに貢献した—を表明するならば、そのひとは非難される。（略）（i ページ）

そして、山辺健太郎著『日本統治下の朝鮮』（岩波新書、1971年）を取り上げ、次のように評価する。

この本は、山辺の思想にもとづく「はじめに結論ありき」の性格がつよく、内容的に著しくバランスを欠く。

本書ではそのようなイデオロギーを排し、実証主義に徹した朝鮮論を提示したい。論点は経済にしばる。（iii—iv ページ）

としている。しかし、本書の内容は、まさに「統計でウソをつく」、あるいは論拠をしめさないでウソをつくことに徹した書である。ここでは、著者が「統計データの整備・分析の進展」と称する、本書に引用されたデータをもとに、本書の批判を試みた。

また、「凡例」には「日本統治期、朝鮮（人）にたいして日本（人）は内地（人）と呼ばれた。戦後の多くの書物はこれを踏襲せず、当時の内地を日本と記している。本書では歴史的用語を尊重する立場

から、日本統治期については、地域（住民）を指す場合、原則として日本（人）を内地（人）と呼ぶ」としている。これは、「歴史用語」を無視した暴論である。当時の文章の引用等においては、「歴史的用語」として、当時の言葉が使われても、それを現代から評価するものでなければならない。この著者の姿勢から、本書では「万歳騒擾事件」（18 ページ他）が使用され、また、地名には日本語読みかなが右側にふられている一方で、まったく意味なく、寧辺には「ヨンビョン」と左側に朝鮮語読みカナが左側にふられている（13 ページ）。「鮮内消費量」（92 ページ）、「渡鮮内地人」（199 ページ）等、朝鮮を「鮮」と略す蔑称も多用している。

結論は、「総合的にみれば、日本は朝鮮を、比較的低コストで巧みに統治したといえよう。巧みにというのは、治安の維持に成功するとともに経済成長（近代化と言い換えてもよい）を促進したからである」（202 ページ）とされる一方、終章には、「朝鮮在住日本人は、軍人・軍属、官吏だけでなく民間人も、地位、財産をすべて喪失した」（202 ページ）という記述もある。解放後 73 年が経過しても、著者の用語法に見られるように朝鮮植民地視、蔑視は継続し、植民地支配清算はなされないままである。日韓外交正常化交渉における高杉妄言を日朝交渉を始めなければならない今、繰り返そうとしているのだろうか。解放後 20 年の韓国では植民地期に流入した資本も「資産」と呼べたかもしれないが、73 年経った現在では日本が朝鮮に持ち込んだものに価値などない。一方で、強制連行はじめ、人々に与えた被害はそのままに継続している。真の意味での賠償がなされなければならない。

（報告の全文は『海峡』第 29 号、社会評論社に掲載してあります）

<2> 「済州歴史紀行」（李映権著、ハンギョシ出版、2004 年）の翻訳書（玄善允訳、同時代社、2018 年 11 月）の刊行を契機に、58 歳の手習い（済州学研究もどき）の 10 年を振り返る。 玄善允

1. はじめに

研究会当日には、A4 用紙で 16 頁もの大部な資料を配布して、それに則って次のような順序で報告した。

A：上掲拙訳書の「訳者後書き」の一部を引用して、訳者である僕と済州との関係の変遷、そして原著との遭遇、翻訳の動機、原著の魅力と裏腹の問題点な

どについて述べた。

B：この 10 年間の僕の「済州学研究もどき」を、公刊した文章や活動の個々について、現時点におけるコメントなども交えて具体的に紹介した。

C：B の延長上にあつて現在進行中の活動について、これまたその個々に関してコメントを添えて紹介した。

そして最後に、D：以上の僕の「済州学もどき」の反省と今後の展望や企画（例えば、第一回「済州の歴史と生活文化フィールドワーク」の紹介と参加への呼びかけ）などについて述べた。

しかし、この月報では紙幅の制限もあって、そのすべてにわたっての報告はできず、以下では上述Dに限定し、それも主要な点に絞って紹介する。

2. 「済州学もどき」を含めた過去10年の僕の活動の整理（反省或いは感慨）と今後の展望についてこの10年間の僕の、特に済州関連の作業を、自らが「研究もどき」と呼ぶのは、決して謙遜などではない。僕は20歳代から40歳くらいまで、仏文学研究を目指していた時期にも、胸を張って「これが研究成果」などと言えそうなことはなに一つ達成できなかった。大学院進学直後に学生結婚し、その後は二人してアルバイト漬けを余儀なくされ、しかも子供も生まれて時間の余裕などなかったという事情もあるが、それはやはり弁解にすぎまい。最大の問題は、研究というものがどういうことなのか全く分からないままに、「現実世界」からの逃避手段として大学院に進み、研究の真似事を始めたという事情だったに違いない。そのせいで、いくら懸命に「お勉強」に努めても、それは研究などとは程遠く、まともな成果など生まれるはずもなかった。そして、現在に至るまで、さらには今後も、僕が研究として誇れるようなものが生み出されるわけがない。何をしても「もどき」のレベルに留まるどころか、下手をすると「外野からの無責任な放言」に墮してしまふ。

しかも、それは僕の生まれて以来の自転車操業的人生の結果でもあって、言わば「宿命」でもあったのかもしれない。僕の人生、いつだって時間と気持ちの余裕がなかったし、そのうえ、辛抱もたりないものだから、適当なところで手を打っては逃げ出して、別のことに手を出す。八方「美人」と言いたいところだが、実は、どこから見ても「醜い老人の所業」にならざるをえない。

要するに、僕が関わる何もかもが、アマチュアのその域を出ないから、研究者を自認する方々からは非難が浴びせられるかもしれない。しかし、それも仕方ないと居直るばかりか、そんな代物にも取り柄があるかもしれないと自らを慰め、さらには、たとえ他人さまには何の役にも立たなくても、少なくとも僕はそれによって救われて生きてきたという実感があるのだから、感謝しないわけにはいくまい。

ものを書きだしたのは、30代から40代にかけての、僕にとっての人生の危機のさなかだった。そんな中で、なんとか納得しながら生きていたと思ったからこそ、自分を叱咤して書こうと努めた。そして、たとえ一瞬のことでも、危機から脱出することができそうに思えることが稀にはあり、その刹那が僕を励ました。書くことは僕にとって「仕事」などではなく、正真正銘の無償の行為であり、生きることと同じことだった。

そんな自分勝手な雑多な作業にも、実は系統性らしきものがなくもない。そのキーワードは「在日」、「済州」、「女性と子供」、「移動した人々とその後裔」、そして、僕にとって「母語」に他らない日本語を中核にしたコトバであり、それらすべてが収斂するのが「人間、とりわけ〔僕〕とその環境」ということになりそうである。あくまでアマチュアとして、それらのテーマの周辺をぶらぶら歩いてきた。そして、今後もそのことに変わりがありそうにもない。

3. まとめに代えて

しかし、そんな気ままな歩みも整理の段階に入ったようである。この30年余り、もっぱら自分のために書きなぐった雑文がさすがにたくさんあって、それらを再読・整理してブログにアップする作業を始めた。しかし、それも遅々として進まない。過去の文章を読んでみたら、そのまま公開するのは「我ながらひどい」と思うことが多々あり、修正に努めているのだが、それが予想以上に難しく、時間を要する。そこには今の僕に通じる多様な欠陥が居座っているからであろう。

したがって、その作業がいつ終わるかの見当もつかなくなってしまうているが、そんな代物でも関心をお持ちの方は、ぜひとも以下のサイトに立ち寄ってください。ブログ：

<http://blog.goo.ne.jp/sunyoonyun5867kamakiri>、
玄善允・在日・済州・人々・自転車・暮らしと物語

あと2年足らずで、25歳から始めて既に40年を越えた仏語仏文学の非常勤講師稼業からは解放（＝追放）される。つまり、長年の自転車操業的生活もジ・エンドのはずなのだから、少しは時間の余裕もできるだろう。しかし、その一方で、老いに伴う集中力と記憶力と体力の衰えはますます深刻になりそうで、その兆候は至る所に既にでてきている。そうした現実を直視し、そして自らに言い聞か

せて、もう少しは「正直」な文章を、もっと「丁寧」に書く。それが僕の最後の夢、もしくはせめてもの義務である。せめて晩年くらいは、スローライフを少しくらいは味わってから、人生を締めくくりたい。おそらくは残り僅かでしょうが、これまでと変わりがなく、忌憚のないご指導のほどを、どうかよろしく

お願いします。

研究会での報告の際に配布した資料全文が必要な方は、以下のアドレスにその旨の連絡をくだされば、メール添付でお送りします。

メールアドレス：sunyoonhyun★yahoo.co.jp 星印を@に変えて送信のこと。

●青丘文庫研究会のご案内●

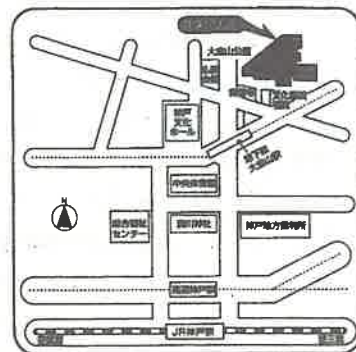
■第320回朝鮮近現代史研究会 7月14日(日) 午後2時～3時

「台湾老兵の朝鮮戦争」 鈴木常勝

■第403回在日朝鮮人史運動史研究会関西部会

7月14日(日) 午後3時～5時 「1969年 神戸商業高校の「一斉糾弾闘争」&その後—教師の立場から」 佐藤三郎&石塚明子

※会場 青丘文庫(神戸市立中央図書館内、TEL 078-371-3351、新館3階で身分を証明するものだして入館証を受け取り4階会議室にお越しください。)



【今後の研究会の予定】●7月27日(土)～28日(日) 日韓合同研究会、東京、7/27(土) 午後1時～5時(予定)、大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター(CAPP) 7/28(日) フィールドワーク、相模湖、CAPP：〒106-0041 東京都港区麻布台1-11-5 東京麻布台セミナーハウス、東京メトロ日比谷線「神谷町」駅(一番出口から地上に出て左、道なりにまっすぐ歩いて約5分)、在日朝鮮人史研究関西部会より発表2名、斉藤正樹「在日朝鮮人集落ウトロ・強制立ち退きを克服」、本岡拓哉「戦後、都市の河川敷に住まう在日朝鮮人」／●8月は休み／9月8日(日) 在日(キムソニア)、近現代史(姜健榮「現在の北朝鮮文化遺産—平壤と開城—について」)／10月13日(日) 在日(梶居佳広)、近現代史(未定)／11月10日(日) 神戸映画資料館で映画上映等／12月8日(日) 在日(安岡健一)、近現代史(山根俊郎)

【月報の巻頭エッセイの予定】 6月号以降の原稿です。締め切りは20日です。足立龍枝、石川亮太、鈴木常勝、梶居佳広、高野昭雄、李裕淑、砂上昌一、藤川正夫、張允植、松下佳弘、三宅洋介、金早雪、高希麗、伊地知紀子、川那辺康一、廣瀬陽一、高正子、斎藤正樹、土井浩嗣、上田文夫、中川慎二、塚崎昌之、宇野田尚哉、姜健榮、佐野通夫、三宅美千代、全淑美、太田修、藤永壮、水野直樹、河かおる、本岡拓哉、梁千賀子、山根俊郎、川瀬俊治、小野容照、樋口大祐、梶居佳広、高木伸夫、長志珠絵、藤井幸之助、黒川伊織、吉川絢子、李月順、高祐二、李景珉、青野正明、呉仁濟、勝村誠、松田利彦、飛田雄一(思いっくまにリストアップしました。前倒しで原稿を書いてくださってもOKです。)

新刊案内/飛田雄一 『阪神淡路大震災、そのとき、外国人は?』 ISBN 978-4-906460-50-2 C0036 ¥410E

神戸学生青年センター出版部、B5、58頁、定価410円+税、2019.7

※購入希望者は574円(送料162円共)を郵便振替で送金ください。82円切手7枚(574円分)でもOKです。郵便振替01160-6-1083 公益財団法人 神戸学生青年センター